セラフィン・バニー　４

葛城　炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セラフィン・バニー　４

【Ｎコード】
Ｎ６６９７Ｆ

【作者名】
葛城　炯

【あらすじ】
惑星調査員であるオレの楽しみはハンバーグを食べること。貴重種のハンバーグを食べて満足していたオレは……ステーキにありついた。

（前書き）

長耳ウサギはバニーガール。セラと過ごす日々。

惑星調査員であるオレがセラフ星に来てから随分と経つが近頃は鼻歌交じりで過ごしている。
何故かと言えば貴重種候補の鳥の肉で作ったハンバーグを食べたからだ。
現地の材料で作ったハンバーグを食べることが惑星調査員仲間内では武勇伝。
それが珍しい生物とかだと株が上がるって言う寸法なのさ。
……とは言ってもそれは仲間内だけで、生物学者達には眉を顰められるのだが。

兎に角、オレは満足している。
事前に狩猟許可を得ていた長耳ウサギには精神感応能力があり肉眼ではバニーガールに見えてしまい、とてもじゃないが文明人としては仕留めることが出来なくなって空しかった日々にはさようなら〜

今日も鼻歌交じりで朝の仕事を終える。
……というか朝にしか仕事はない。
この惑星の大気圏に滞空しているメカどもから低軌道衛星がデータを受信、一時保存。それをこの着陸船に送信。太陽電池が動き出す朝から昼までにデータの受信、確認を行い、昼頃に第1衛星に着陸してある母船に送信。データにミスなどがあったら再調査を指示。
……なんだが、大抵はデータにミスはなく、また再調査を指示するほどに間抜けな性能のメカもなく、結果として朝だけで1日の仕事は終わる。母船との送受信は自動だから手を下す必要もない。
さて。今日は何しようか？

「おはよう。セラ」

セラと呼ばれた長耳ウサギというか見た目バニーガールは「み！」と短く鳴いて微笑み、朝の食事を続けた。
このセラには棘を抜いてやったり、キョクハヤブサに襲われたのを助けたりという出来事の御陰で懐かれている。
……その実態はオレのハンバーグへの欲望に他ならなかったり、それだけでもなかったりするのだが。
ま、セラはオレのことを信じているらしい。
証拠に着陸船近くから離れない。巣穴もタラップ付近に掘り直して棲んでいるらしいし。

オレはパイプベッドを取り出して寝そべる。
ベッドの横には角竹の葉で作った格子がある。
どうやら水平方向に何もないと上空からキョクハヤブサに襲われるらしいのでこの島の海岸付近の崖付近なんかに生えている三角形やら四角形の断面の角竹の葉（一定の幅で細長い葉）でラティスみたいな仕切を作って立ててある。
この角竹の葉というのは切ってから半日も干しておくとその時の形のままで固まってしまう。厚さも数ｍｍ在って丈夫。便利な材料だ。
三角の竹の上に四角の竹を適当に並べて作ったデッキも心地よい場所だ。
……オレがベッドを置きに行くと、隙間に隠れていた長耳ウサギというかバニーガールが逃げ出す様子はちょっとだけ腹立たしいが。
ま、一度は電磁麻酔銃で追いかけ回したのだから仕方ない。
それでもキョクハヤブサからセラを助けというコトで幾分かは警戒を解いてはいるらしい。その直前には着陸船近くには寄っても来なかったのだから。

ベッドに寝そべっているとセラが朝の食事を終えたようで満足げな顔でベッドに登ってくる。

「みっ！」
バニーガールはいつでも微笑んでいる。
……今現在はセラだけだが。
セラにしてみればキョクハヤブサに襲われても助かったという事実から、オレの近く以上に安全な場所はないと言わんばかりにいつでも近くにいる。というか引っ付いてる。
……なんか、親か何かと勘違いされているような気もしないではない。
しかし誰もいないこの惑星で懐いてくれる存在というのは貴重だ。孤独のあまりノイローゼになるヤツも珍しくはない惑星調査員という仕事。ハンバーグを作って食べるというのが仲間内での武勇伝となるのも納得してしまう。
……改めて思うが、何を納得しているんだか。
それでも貴重種候補の鳥を食べたという満足感でいっぱいだ。腹の上のセラも満足げに微笑んでいるし。
この満足感で最後の日まで過ごせたら何もいうコトはない。

……とはいえ暇である。
見上げる青空に登っていく太陽の横に第1衛星が見える。ということは干潮だな。昼頃までは低いままだろう。
「潮干狩りにでも行くか」
唐突に思いつき行動に移る。
海棲動物、単純に言って魚の類は貴重種は少ないという以前に基本的に数が多い。釣りに関しては許可不要で無制限に認められている。これが入植するとかの詳細調査用に調査船が送り込まれたりすると大型魚類とかが貴重種として認定されたりもするのだが、海岸近くにいるヤツらが貴重種となる確率は皆無に近い。
遠慮せずに獲りに行こう。
暇つぶしに。

徐ろに起き上がりセラを下ろして格子の横に置いてある片手間で作った籠を背負って海岸へと向かう。もちろん電子麻酔銃は調査員としての必携道具。
待て。海岸にはどうやっていくんだっけ？
前任のレポートをタブレットで確認。
……するとセラが服を掴んで肩まで登って覗き込む。
「痛いなぁ。爪を立てるな……と言っても判らないよな」
「み？」
「海岸へ行きたいんだが、知っているか？」
「みみ？」
……精神感応能力があると言ってもコッチが考えている論理的質問に答えるだけの能力ではないらしい。当然と言えば当然だが。
ま、なんとかなるだろうと歩き出す。

籠の中へと移動したセラは満面の笑みで周りを見ている。
籠というかオレを自分専用の乗り物だと勘違いしているようだが気にしない。
「そういや。セラ。オマエ達は雑食だと前任のレポートにあるんだが本当か？」
「み？」
「でも主食は草なんだよな？」
「み～」
「草の他に何を食べるんだ？」
「み！」
「木の実か？」
「みっ！」
「そうだよな。実の方がんまいよな～」
多分、傍から見たら呆れるような会話というか光景だというのは自覚はしている。

誰もいないからいいじゃないか。
「そういえば……あの実はなんだか知っているか？」
『あの実』というのはキョクハヤブサをハンバーグにして食べた次の日に着陸船のタラップに1つだけあった手のひらサイズのラグービーボール型の実。見た目としては麦の実っぽいのだが、如何せんサイズがデカい。風に乗って飛んでくるほどの軽さではない。不思議に思いながらも『要調査』とラベルを貼ったサンプルケースに入れてある。
「鳥でも落としていった？　……どした？」
何故かセラが背負っている籠から身を乗り出して額を擦りつけてきた。
……見た目はバニーガールだが感触は毛皮のそれ。
なんとも不可思議な感覚。
「ん～？　なんかネコみたいな仕草だな？　そういや、香味野菜が好物というのは……どっちかというとリスっぽいんだが……」
実体としての形はウサギで仕草はネコで、内臓とか手首とかの構造がリスで見た目がバニーガール。
「なんとも不可思議な存在だな？　オマエ達は」
「み～？」
言葉の意味が判っているのか判らないのか……いや、間違いなく判っていないのだろうが、セラは満足げに微笑みながらオレの肩越しに前を見ている。
ふと、その光景に違和感が……
「羽根？」
セラの耳の後ろに鳥の羽根みたいのが見える。
指でつまんでみると……確かに鳥の羽根。
「みみっ！」
セラが怒ったのは摘み上げる時に痛かったのか？　それとも毛も一緒につまんでしまったのかも知れない。
「キョクハヤブサの羽根かな？　飾っていたのか？」

「み？」
きょとんとした顔で小首を傾げる。既に怒っていたのを忘れてしまったようだ。
「乗り心地は如何ですか？　セラ様」
「みっ！」
……世の中にはペットに話しかけて会話が成立していると宣う人がたまにいるが今はその人の気持ちが判る気がしている。
ま、幻想だろうけど。

そうこうしている間に海岸への道を見つけた。
どうやら前任が造成してくれたらしい。わりかし楽な道のりというか斜面に角竹で階段が作ってあった。
降りた先は岩浜。
ちょうど干潮真っ盛りのようで潮溜りがあちこちにある。
覗いてみれば……いるいる。
見たこともない形の魚やら、見たことのあるような形の魚やら。
どっちかと言えば、見慣れた形が多いのは、やはり水の中で動き回るのは同じような形になるらしい。
岩肌には海草が茂っていて滑りやすいが転ぶようでは惑星調査員とは言えない。
「取り放題だな」
とはいえ惑星調査員としてはサンプル採取が仕事である。
ネットバルーン弾を1つ使って作った手網で魚を捕ってはカメラで撮影。ささっと捌いて種類別に内臓をサンプルシリンダーに。残りは籠へと放り込む。ま、細胞というかＤＮＡは内臓細胞から判るし、何を食べているのかも判る。骨格なんかは着陸船に戻ってレントゲン撮影すれば良し。
岩肌には海草が茂っていて滑りやすいが転ぶようでは惑星調査員とは言えない。漁……じゃない調査には全く影響ない。

セラはといえば、籠の上に鎮座して辺りを見渡している。
どことなく、籠の中の獲物を誰かに捕られまいと見張っているようだ。
「ははは。ありがとよ。セラ」
見張っていることを感謝すると……急にセラが様子を変えた。
「みっ！　みみっ！」
何か睨んでいるようだ。
「どした？」と声をかけると……急に跳び逃げる。何処まで行くのかと見ていれば……岩浜への降り口の斜面まで走っていった。そこで振り返って……頻りに鳴く。
「みみっ！　みみっ！　みみみっ！」
なんか警戒しているような鳴き方。
「……何かあるのか？」
振り返って見渡しても何もない。一面の岩浜に潮溜りが点在している。
「何もないぞ？　どうした？　って！　なにっ！」
オレの言葉の続きは驚きと共に呑み込んだ。
何かがオレに影を落とした。振り返って見上げたオレの眼に飛び込んできたのは……巨大な岩。いや魚？
「うわっ！」
慌てて横に跳び逃げる。オレのいた場所に落ちてきたのは……岩石のような巨大な魚。
「な、なんだぁ？」
と驚く間に次々と岩石魚が海面から飛び上がってくる。
あっという間に辺り一面、岩石魚だらけ。
大小様々、オレの背の丈より大きいのやら小さいのやら。まるで魚市場のようだ。
「何が？　っ！」
海面に視線を移すと……巨大な眼が沖の岩にあった。
「岩？　錯覚？」

岩ではない。錯覚でもない。何か巨大な生物。
「……あれは？　ひょっとして？」
疑問は当たった。その岩は瞬く間に海面から立ち上がり、覆い被さるようにこちらを睨んでいる。
「く、首長竜っ！？」
驚くより先にするべきコトがある。それは……逃げるコト。
だが、痩せても枯れても惑星調査員。反射的に電磁麻酔銃を取り、引き金を引いた。
だが、相手の図体がでかすぎる。岩のような首がオレの真上に落ちてくる。オレは逃げようとして足を滑らせた。

「……セラ？」
気づけば……セラがオレの顔を舐めていた。
セラが舐めている場所が痛い。手で押さえると血が流れていた。足を滑らせて頭を打って……無意識に転がったのか浜の岩で額の何処かを切ったらしい。
「傷口を消毒してくれていたのか？」
「み～」
頭がぼんやりとしているのは出血のせいかも知れない。
「え～と。何が？　……ぅわっ！」
見渡して驚いたのは……オレがノビいていた真横に巨大な頭。というか口。
「わわわわっ！　……って死んでる？」
いや、単に気絶していた。
電磁麻酔銃が効いたのか、それともちょこっとだけ効いて、岩浜に頭をぶつけた衝撃で失神したのか？
兎に角、するべきコトは１つ。
「逃げるぞっ！」
「みっ！」

オレとセラはそそくさと岩浜を後にした。

斜面途中まで逃げて、惑星調査員としての自覚というか誇りというか、仕事を思い出した。

襲われない場所まで逃げたという安心感が思い出させてくれたのだろう。振り返って沖合をテレスコープゴーグルで探る。

……と、いるいる。

首長竜の団体さんが浜近くで回遊している。

察するに……狩りをしていたのだろう。

首長竜が団体で岩石魚の集団を追い込んで浜に打ち上げさせる。打ち上がった岩石魚は呼吸困難となって動きが鈍くなったところを潮が満ちた辺りで捕食。オレを襲ってきたのも首長竜としては小型。つまりは子供のようで焦って浜まで飛び込んできてしまったというコトなのだろう。

潮が満ちて浜近くに回遊し、弱ったというかご臨終の岩石魚を食べるところまで撮影して……惑星調査員としての仕事は終わった。

籠の中には逃げる時にちゃっかりと掴まえた岩石魚の小さいヤツが放り込んである。小さいと言っても先に捕まえていた小魚よりは遙かに大きい。

単純に言えば外骨格の頭部を持った鰹というか小型のマグロ。化石でしかお目にかかれないという甲冑魚の一種だろう。

御陰で今夜の晩餐のメニューは決まった。

帰ってサンプル達を分析機にかける。レントゲン撮影をした小魚たちは開いて干して後日の副菜にする。

掴まえた岩石魚のメニューはステーキだ。

出来れば刺身で食べたいところだが寄生虫なんかの恐れがあるの

で火を通さないと。
それでも……バターでソテーしたステーキはかなりの美味であった。
セラにステーキの欠片を褒美として与えてみると……美味しそうに食べている。
やはり長耳ウサギは雑食なのだなと確認できた。
岩石魚（仮命名：鎧マグロ）は美味だと仲間達には自慢しよう。
充実した日々。
首長竜と鎧マグロに感謝する。

翌日のジンマシンさえなければもっと良かったのだが。

（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
投票、感想など戴けると有り難いです。
画像は、まるかた氏の「バニーさんと緑芝」です。イメージに合っていたため、掲載の許可をいただきました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6697f/

セラフィン・バニー　４

2010年10月8日15時49分発行